

「山と本と酒」

古関正雄

山と本と酒の人生・・・と言ったのは上田哲農か安川茂雄だったか。いや、私も結構その口である。酒はともかくとして山と本は人生を豊かにしてくれるものだと思う。中でも本は山と人生をより味わい深くしてくれる存在だと言える。あまたあるスポーツや趣味の中で山の世界ほど本が世に出て、愛読されている分野はほかにはないのではないか、と思う。

昨年の2月にヨーロッパアルプス行きを一念発起してからこれまでに多くの本を読み、手元に置いておきたい本を揃えてきた。本もあまり持つと場所をとるので基本的には図書館で借りて、一度読んでもなお手元に置いておきたい本や資料性の高いもののみ揃えるようにしている。絶版になっている本も多いが、アマゾンやヤフーオークション、日本の古書店などのサイトをチェックしたり、神田の悠久堂などへ出向いて古書をあさったりした。探している本と出会った時の喜びは格別である。



【資料性の高い本は手元に置きたい】

私は目指す壁やルートなどについての初登攀の記録や歴史などをあらかじめ下調べをするのがとても好きである。コピーしたトポを持ってルートに登りに行くだけでは得られない感動があるのだ。山学同志会を鍛え上げた小西政継さんには多くの著作がある。小西さんの「マッターホルン北壁」や「グランドジョラス北壁」を読むとわかるが、一つの章がまるまる目指す壁の登攀史に費やされているのである。「小西さんほど山を知っている人はいない」（群馬の八木原罔明氏談）と言われるほどの人だったが、彼の実践を支えていたのはほかならぬ膨大な読書量、下調べであったのだと思う。

さて本題に入ろう。ヨーロッパアルプスに関する資料性の高い本から紹介しよう。ヨーロッパアルプスについて全くの門外漢だった私にとって羅針盤になった本が「モンブラン山群 特選 100 コース」ガストン・レビュファ（山と溪谷社）だった。この本はシリーズになっていて他に「ゼクラン山群」レビュファ、「ベルナー・オーバーラント」ハンス・グロッセン、「ヴァリス・アルプス」ミシェル・ヴォシエと合計で4冊である。各山群から代表的な100ルートを選び出し、やさしいものから難しいルートへと順を追って紹介されて



【特選 100 コース】



【ルート図は現地でも手に入る】

いる。ルートごとに概説から始まり、初登攀、標高差、難しさ、所要時間、用具、出発地点、そしてコースのアウトラインが美しい写真とともに説明されている。訳はすべて近藤等氏によってなされている。また地域ごとに地質と風土、

歴史などについて詳しく書かれ、「モンブラン山群」では「アルピニストになるために」という別項が加えられている。「ドロミテ山群」「カラंक」の特選 100 コースが次々と刊行される予定であったが、少なくとも日本語訳は出ていないのがとても残念である。定価は 6690 円から 8030 円と高価な本だが、それに見合う内容があるし、インターネットで調べると時々 5000 円以下で売りに出されている時がある。

「ヨーロッパの岩場」小森康行（東京新聞出版局）も資料として使える本だ。モンブラン山群、ヴァリス・アルプス、ベルナー・オーバーラントの他にドロミテも紹介しているのありがたい。先の特選 100 コースほど詳しい解説がされていないのが残念だが、写真と絵を使って見やすい構成になっている。

4000m 峰のピークハントを狙うにはまず「アルプス 4000m 峰 登山ガイド」リヒャルト・ゲーデケ（山と溪谷社）で概略をつかむと良い。日本語訳が出ているし、ポケットに入れて持ち運べるサイズがうれしい。ベルナー・オーバーラント、ヴァリス・アルプス、モンブラン山群の他、単一の 4000m 峰としてピッツ・ベルニナ、グラン・パラディゾ、パール・デ・ゼクランが紹介されている。「五十歳からの挑戦」内田陽一（東京新聞出版局）もピークハントを目指すなら読んでおきたい。著者は 4000m 峰を 36 座も登っている。比較的新しい情報が載っているし、コラムが面白い。また巻末の参考文献も良くまとまっている。「七十歳はまだ青春」脇坂順一（山と溪谷社）は読み物としても面白く、山行ごとにきちんとコースタイムが記されているのに驚かされた。

翻訳家として有名な近藤等氏だが、著者としても、さらには登山家としてもものすごい実績を残している。「シャモニの休日」（白水社）ではシャモニの街の紹介から始まり、国立登山スキー学校の講習会での体験やグレポン、ダン・デュ・ジェアン、ドロミテ、そしてマッターホルンのヘルンリ稜での登攀が実に清々しく描かれている。私はこの本を読んですっかり心をわしづかみにされてしまった。近藤氏の 1968 年から 1971 年までの登山の記録をまとめたのが「アルプスの空の下で」（白水社）だ。レビューファを始め、アンドレ・コンタミヌなどとの山行の中で、「スピード、イコール安全」というアルプス登山の鉄則が随所に語られている。巻末にはコンタミヌ作のルート図が付いている。1972 年から 1974

年までの夏のアルプスでの登山は「星空の北壁」（白水社）としてまとめられている。前作よりも全般的に登攀の難度が上がり、ピッツ・ベルニナやピッツ・バリユなどのベルニナ山群やドロミテなどにも足を延ばしている。レビューやコンタミヌ、アンセルム・ボーなどとザイルを組んでいる。1975年から1978年までの夏のアルプスの記録をまとめたのが「アルプスに光みなぎる時」（東京新聞出版局）だ。今は亡き中野融氏もパートナーとして登場する。これら4冊の本は「親しい仲間と分かち合った山の楽しい思い出を記憶にとどめておくために執筆した」とあるが、充分登山の資料として使えるし、各章の終わりには山行タイムが載っているので参考になる。ところがこの山行タイムがとても速いのだ。「スピード、イコール安全」をいかに実践するか、51歳を超えた私にはなかなか難題である。



【通勤電車の中で読みました】

著者がこれまで登った峰のうちから六十五峰、いずれ登りたい峰のうちから五峰を選んで各ピークの特徴、登攀史と主要ルート、著者が登った時の印象を写真も織り込んで作られたのが「アルプスの名峰」（山と溪谷社）だ。「アルプスの名峰」でアウトラインを押さえて、「特選100コース」でルート内容を再確認、近藤氏の上記4冊の本でルートの具体的なイメージをふくらます、そんなパターンでこの2年間アルプスを登ってきた。

近藤氏がこれまで発表してきた著作の集大成と言えるのが「アルプスの蒼い空に(上・下)」（茗溪堂）だ。今までの著作の中から特に気に入った印象深い山行を選び、一緒に登ったパートナーへの限りない感謝と愛情がつづられている。

ロッククライミングのルート図ではモンブラン山群のミディ周辺とプラン、グレボン、シャモニ針峰群、そして赤い針峰群に範囲が限られるが「**THE MONT BLANC RANGE TOPO GUIDE—VOLUME 1**」 **MICHEL PIOLA**が見開きでイラストによる見やすいルート図とルートごとの解説（英語）がされている。最近改訂版が出たようだが、なかなか高価である。比較的新しい所では「**THE MONT BLANC RANGE Classic Snow,Ice,and Mixed Climbs**」 **Jean - Louis Laroche and Florence Lelong**がモンブラン山群のクラシックルート全般をとり上げている。美しいカラー写真、見やすいイラストで21ルートの説明（英語）がされている。また巻末の山小屋情報、ツーリストオフィス・天気予報・レスキュー、参考文献も有用だ。

氷河上の岩と雪の世界に疲れたら、トレッキングしてみるのも良いだろう。「**HIKING in THE ALPS**」 **中野融**（山と溪谷社）は1984年の出版なので最新の情報とは言えないが、モンブラン山群、ヴァリス、ベルナー・オーバーラント各山群の展望台、登山コース、ハ

イキング・コース、そしてタウンガイドを載せている。「グリンデルワルト周辺を歩く」「ツェルマット周辺を歩く」「シャモニ周辺を歩く」小川清美（山と溪谷社）や「スイスアルプス・ハイキング案内」小川清美（山と溪谷社）はハイキングやトレッキングルートを取り上げている。

アルプスの歴史を物語る本ではなんとといってもまずは「アルプス登攀記」エドワード・ウィンパー（森林書房）だろう。また「私の山旅」榎有恒（岩波新書）でアイガーの東山稜の初登攀についてふれているが、より詳しくは「榎有恒全集 I 憧憬」（五月書房）の「山行」を参照するとよい。イタリアのドロミテの岩場の初登攀をしたエミリオ・コミチの「あるクライマーの生涯」（二見書房）を見ると、装備に頼らない昔のクライマーの強さに驚く。アルプスの歴史についてはまだまだこれから読み進める予定である。

アルプスの三大北壁などでは「星と嵐」ガストン・レビュファ（白水社）を読んでみたい。「北壁を登るには、ビヴァークせねばなりません。そこで<星>という言葉が出てくるわけで、また登攀が長いことからしばしば悪天候に襲われます。ここから<嵐>という言葉が出てきて『星と嵐』としたわけです」とレビュファは翻訳をした近藤等氏への手紙で本のタイトルの所以を語っている。1954年度山岳文学大賞の栄冠に輝いた「星と嵐」ではテクニク的なものではなく、人間味に重きがおかれ味わい深いものになっている。「ただ単に、読者を興奮させ、山岳と人間との最高度に激しい闘いにおける人間の意志の強さを知らせるには、事実の客観的な報告そのもので十分で、なにも文章の推敲を重ねる必要がない」（近藤氏）ものの代表作として「アルプスの三つの壁」ヘックマイヤー（「世界山岳全集 10」朋文堂 所収）が挙げられている。確かに「星と嵐」と比較すると無味乾燥な印象はぬぐえない。ちなみに「世界山岳全集 10」にはほかに「グランドジョラスの北壁」フレンド、「ドリュの西壁」マニョーヌ、「ドリュの西壁<積雪期>登攀」クジーも収められている。

「グランドジョラス北壁」小西政継（中公文庫）や「マッターホルン北壁」小西政継（中公文庫）では、日本の冬壁で鍛えヨーロッパアルプスへ挑戦していく姿を克明に記録している。さらにその延長線上にヒマラヤのバリエーションルートからのアタックを既に描いていたのだから、小西氏の慧眼には驚かされる。昭和43年に発行された「マッターホルン北壁」（山と溪谷社）の序文で横川文雄氏は大切なことを記している。「また本書を読まれる方は、とくに若い方々は、勝利の月桂冠を戴くということは、登頂という現実的な成功より、むしろ、その頂に至る長い長い精進の道であり、周到緻密な準備と努力の道であることを、これまた素直な気持ちで味読してほしいと思う。」

これまで触れてきた本以外にこの2年間に読んだ本を紹介しよう。私は通勤が遠いのもっぱら電車の中で本を読むが、慣れれば動く書斎のようなもので通勤時間を有意義な時

間に置き換えることができる。(面白かった本には*マークを付けてある) *「あしたはド
ロミテを歩こう」角田光代(岩波書店) 「山こそ我が世界」ガストン・レビュファ(山
と溪谷社) 「アルピニズモ・アクロバチコ」ギド・レイ(講談社文庫) *「問いかけ
る山」飯田年穂(木魂社) *「わが生涯の山々」ワルテル・ボナッティ(山と溪谷社)
「はじめてのモンブラン」清水竜基(夢工房) 「自力で安く登る海外の山」黒川晴介(山
と溪谷社) *「アルプスの谷 アルプスの村」新田次郎(新潮文庫) 「スイス山岳列
車の旅」池田光雅(東京書籍) 「地球の歩き方 BY TRAIN スイス鉄道の旅」(ダイヤ
モンド・ビッグ社) *「アルプスの山旅」安川茂雄(あかね書房) 「雪・岩・アルプ
ス」藤木九三(中公文庫) *「グリンデルワルト便り」中島正晃(山と溪谷社) *「た
った一人の山」浦松佐美太郎(文藝春秋) *「ザイルの二人」嶋満則・秋子(山と溪谷
社) *「長い壁・遠い頂」井上進(神無書房) 「アルプス記」松方三郎(龍星閣)

では最後にこれから読んでみたい本です。「語りかける山」飯田年穂 「スイス日記」
辻村伊助 「挑戦者‘65 アルプス登攀の記録」第2次RCC 「山の生涯」田口二郎 「無
償の征服者」リオネル・トレイ 「大岩壁の五十年」R・カシン 「あしたはアルプスを
歩こう」角田光代 「八十歳はまだ現役」脇坂順一 「ザイルのトップ」ロジェ・フリゾ
ン・ロッシュ 「アルピニストの心」ジャン・コスト 「わが回想のアルプス」近藤等 「知
命からのヨーロッパ・アルプス」内田陽一 「大岩壁のプロフェッショナル」ルネ・デメ
ゾン 「グランド・ジョラスの342時間」ルネ・デメゾン…泉のように湧きあがります。